

## 今週の為替相場見通し(2019年4月1日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.70 ~ 110.95	110.82	109.70 ~ 112.20
ユーロ	(ドル)		1.1210 ~ 1.1331	1.1218	1.1100 ~ 1.1300
(1ユーロ=)	(円)		123.65 ~ 125.00	124.30	123.00 ~ 125.00
英ポンド	(ドル)		1.2977 ~ 1.3269	1.3037	1.2950 ~ 1.3250
(1英ポンド=)	(円)	*	143.83 ~ 146.51	144.44	143.00 ~ 147.00
豪ドル	(ドル)		0.7063 ~ 0.7147	0.7097	0.6950 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	77.54 ~ 79.00	78.67	77.00 ~ 79.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1)今週の予想レンジ: 109.70 ~ 112.20 円

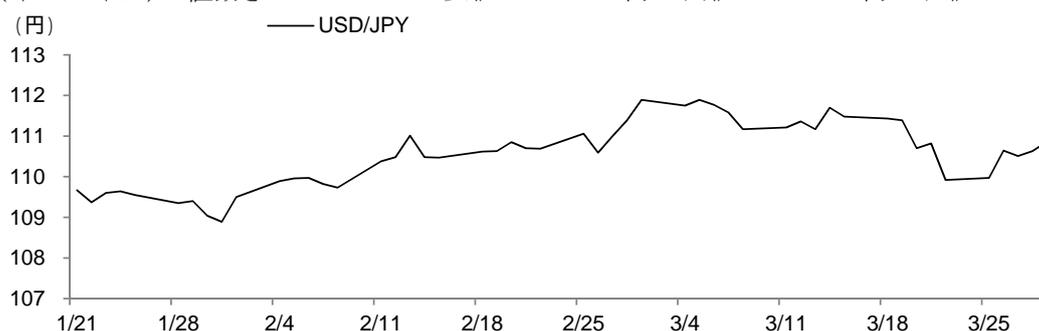
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、週初下落後、後半にかけて上昇。週初25日に109円台後半でオープンしたドル/円は、アジア株が軟調に推移する中リスクオフ地合いが強まり、ストップを巻き込みながら一時週安値となる109.70円をつけたが、米長期金利の上昇を手がかりに110円台前半まで戻す展開。しかし、イスラエルとシリアが領土問題で対立するゴラン高原についてトランプ米大統領がイスラエル主権を認めると宣言し、中東情勢悪化懸念から109円台後半まで反落。26日は株式相場が堅調に推移したことから110円台半ばまで上昇、その後は米経済指標の下振れにも下値は限定的で、米株高、金利上昇を背景に110円台後半まで上伸。27日早朝、FRB理事候補ムーア氏の、FRBは直ちに利下げをすべきとの発言から110円台前半まで反落したが、米金利が下げ渋る展開に110円台半ばまで回復。28日は前日のブレグジットに関する8つの「示唆的投票」で、すべて否決されたことからポンド/円が下落する動きも手伝いドル/円は110円近くまで値を下げた。その後は、米10~12月期GDP(確報値)は市場予想を下回るも、株価の下げ止まりに加え、月末に向けたドル買いもサポートし110.80円超えまでショートカバー。翌29日は、本邦月末・期末により需給に振られる展開となり、仲値にかけては週高値となる110.95円を示現。その後は、本邦実需の円買いフローにより110円台半ばまで下落する場面も見られたが、海外時間には米金利の上昇等を背景に底堅い動きが継続し、110.82円で越週した。

今週のドル/円相場は、底堅い展開を予想。3月は、世界景気減速懸念が相場のテーマとなる中、2007年以来の米10年金利と3か月物金利のインバートも意識され、主要通貨では円、次いでスイスフランが最も買われる動きとなった。しかしながら、足元では米金利の低下幅縮小に加え、月末・本邦期末に向けたドル買い需要もサポートし、ドル/円は109.70円の安値を示現後は底堅い推移となっている。需給環境に鑑みても、FOMC後の米金利低下を試す局面でも110円付近での良好な押し目買い意欲を確認していることに加え、テクニカルには一目均衡表の雲上限や、週足での雲下限にサポートされて反発している格好。株価は依然として高値圏での推移が継続、また米金利の低下にも一服感が出ており、週末には米10年債利回りは2.4%超えまで上昇して越週している状況の中、短期的にはドル/円も戻りを試す展開となろう。今週は、5日(金)米3月雇用統計他、米経済指標が複数予定されており、数字の下振れによっては米金利が再度低下幅を拡げる展開には警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/25~3/29)の値動き: 安値 109.70 円 高値 110.95 円 終値 110.82 円





### 3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3250 143.00 ~ 147.00 円

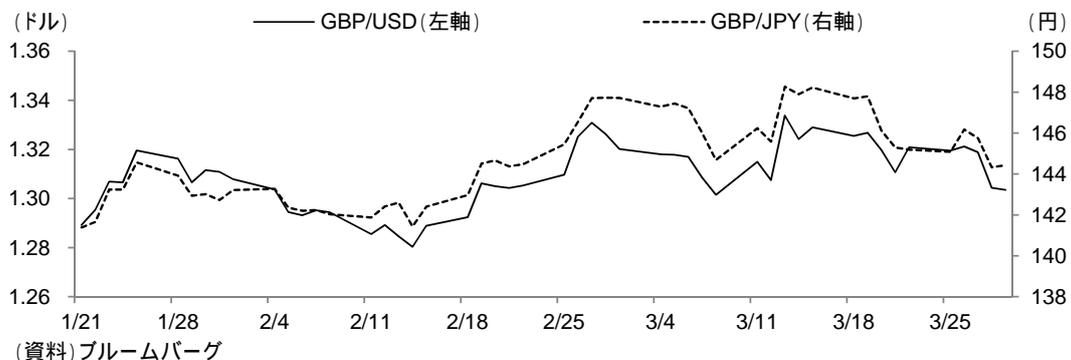
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、下落して安値引け。対ドルでは、週央まで横這いが先行したが、対円、対ユーロでは週央まで小幅ながらポンド堅調推移が先行した。ドル指数(ICE)は、26日以降、ほぼ一方的なドル堅調推移。2.50%を割り込んで25日まで急落していた米10年国債利回りが、26日、底打ち反発したことが、ドル反発のきっかけを提供したものと考えられた。翌27日、当該利回りが再び下落に転じたにもかかわらず、ドル堅調が続いたのは、並行して当該独国債の利回りが、マイナス金利の水準にあって、当該米国債のそれ以上に低迷した(米独利回り格差はその後週引けまで僅かではあるが拡大を続けた)ことが背景と考えられた。通貨市場全般のドル堅調地合いの中で、27日までポンドがドル並みの堅調ぶりを見せたのは、膠着するEU離脱交渉に活路を見出す可能性が期待されたからではないか。25日に英下院で可決されたレトウイン議員提出の修正案は、下院が同交渉の主導権を握ることを可能にした。この決定に従って27日実施された下院投票では、「関税同盟残留」「関税同盟と単一市場残留」「離脱合意承認のための国民投票実施」「離脱取り止め」など8つの選択肢の中から、下院が合意し、EUとの交渉に移せる条件を見出すことが期待された。しかし、その後ポンドが主要通貨全般に対して下落に転じたのは、8つの選択肢全てが否決されたのが原因。更に29日、メイ首相が最後の望みを掛けて採決に掛けた、自身がEUと握った離脱合意(付帯する政治宣言を除く)の可否を巡る投票は、またしても大差で否決された。一連の否決で、下院がEUと合意できる条件を見出すのは困難、4月12日に「合意なき離脱」を強いられる可能性が高まったとの見方が強まり、ポンドは全面的に売り込まれた。

今週の英ポンド相場は、反発を中心に予想。本来のEU離脱期限であった3月29日に採決された、メイ首相の離脱合意を巡る3度目の投票は58票差でまたしても否決された。1回目(230票差)、2回目(149票差)と比べれば票差は減っているものの、これ以上の寝返りを見込むのはほぼ無理との見方が支配的。メイ首相は27日、合意成立を前提に自らの辞任を約束したが、合意が成立しなかった結果、引き続き首相の座に居座る見込み。EUは、29日までの合意がなければ、① 4月12日に合意なき離脱か ② 5月の欧州議会選に参加するかのいずれかの選択を突きつけており、3月13日、27日と2度に亘って合意なき離脱が否決されている以上、(いずれの採決にも政府に対する拘束力はないものの)欧州議会選に参加、離脱期限の長期延長を申請する蓋然性が高く、メイ首相も素直に長期延長を申請する意向を示している。一方で、27日に8つの選択肢のいずれも過半数を獲得できなかった下院投票(所謂「インディカティブ投票」)だが、項目を更に絞って週明けに再度採決される見込み。再交渉に向けた時間的な余裕が生まれる可能性が高いことで、従来環境では過半数を集められなかった何らかの条件が、1日の投票では議会の合意を見出すことが期待される。現時点で有力と見られているのは、英全土の関税同盟残留を前提としたEUとの再交渉だが、関税同盟だけでは、アイルランド島の国境問題は解決が難しい点には留意が必要(単一市場にも残留すれば解決できる)。再国民投票実施で離脱そのものが取り止められる可能性が拓けることが、中期的には最も好ましい選択肢だが、万が一、解散総選挙実施に向けた流れが強まることになれば、少なくとも短期的には、不透明感を嫌ったポンド売りが優勢になろう。

#### (3) 先週末までの相場の推移

先週(3/25~3/29)の値動き: (対ドル) 安値 1.2977 高値 1.3269 終値 1.3037  
(対円) 安値 143.83 高値 146.51 終値 144.44



## 4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6950 ~ 0.7200 77.00 ~ 79.00 円

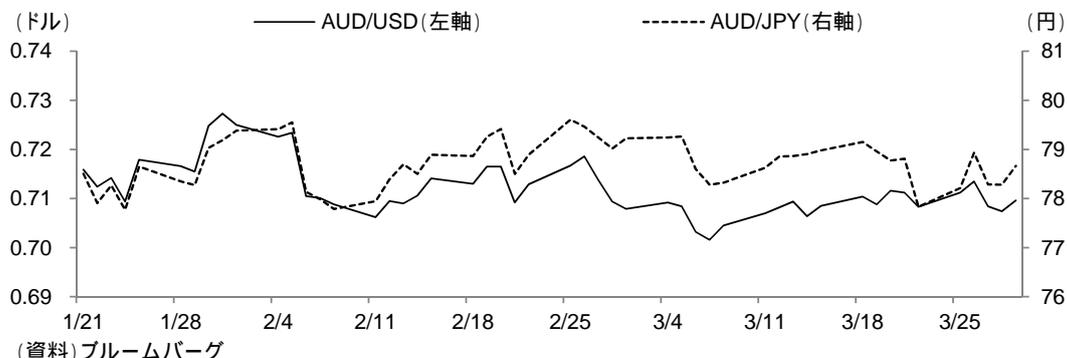
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は方向感に欠ける推移となった。週初25日(月)に対ドルで0.70台後半、対円では77円台後半でオープン。先週金曜日の海外時間のリスクオフの流れを引き継ぎアジア株が全般的に軟調推移となると、対ドルでは0.70台後半、対円では一時週安値となる77.54円まで下落。しかし、その後は米金利の低下に伴いドル売りが強まると対ドルで0.71台前半まで上昇した。26日は先週から続いた世界景気停滞懸念は行き過ぎとの見方もあり、リスクオフの巻き戻しが入ると豪ドルは堅調推移となり対ドル・対円でそれぞれ週高値となる0.7147・79円ちょうどまで上昇。27日はニュージーランド準備銀行(RBNZ)が今後の金融政策について「利下げの可能性が高い」との見方をサプライズで示したことからNZドルが急落すると、豪ドルも連れ安に。さらに、海外時間に入り世界的な景気減速懸念の高まりが意識される中、対ドルでは0.70台後半、対円では78円台前半まで値を下げる展開となった。28日はアジア時間においては動意に乏しい推移が続いたが、海外時間に入り前日のリスクオフの巻き戻し的な動きから米金利が上昇すると、ドル買いが強まり、対ドルで一時週安値となる0.7063まで下落。29日は米中通商協議に対する進展期待や弱い米経済指標を受けたドル売りを受けて豪ドルはじり高推移となり、0.71台まで上昇する局面が見られた。その後は小幅に水準を戻し対ドルで0.70台後半、対円では78円台後半で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い推移を予想する。注目は2日(火)に開催される豪準備銀行(RBA)理事会。今会合においては政策金利の据え置きが予想されているが、国内の住宅市場の減速等を背景に市場においてはRBAに対する年内利下げ観測が高まっている状況。さらに、先週RBNZが今後の金融政策について「利下げの可能性が高い」とサプライズで示したことで、RBAも追随する格好でハト派化を強めるとの思惑が高まっていることが想定され、RBA理事会に向けては豪ドル売りが先行しやすいと予想する。明確にハト派色を強めなければ理事会後に買戻しが入る局面もありそうだが、国内の経済指標が良好とは言えない状況下、今会合の内容が利下げ観測を大きく後退させるほど先行きに対する強気な姿勢を表明することは考えづらく、買戻しは一時的なものにとどまると考える。また、先週は米中通商問題への進展期待から豪ドルが買われる局面も見られたが、クドロー米NEC委員長は「米国は数週間か数か月延長する用意がある」と発言。進展期待こそ高まってはいるものの、早期に合意に至るといいうわけではなさそうであり、豪ドルへの上昇圧力は限定的となると考えている。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(3/25~3/29)の値動き: (対ドル) 安値 0.7063 高値 0.7147 終値 0.7097  
(対円) 安値 77.54 高値 79.00 終値 78.67



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。